

県立自然史博物館の早期建設のための 私たちの考える自然史博物館の機能と規模

自然博ネット事務局

第3回理事会で、私たちの考える県立自然史博物館について理事会での共通認識をもつために短い時間ですが話し合いをもちました。その内容を具体的に要約したものを提案します。施設の規模については北九州市立いのちのたび博物館（自然史・歴史博物館）程度のものです。

1. 県立自然史博物館の目的と機能

静岡県の豊かな自然の現在を知り、未来にどのように生かすかを県民とともに考える場としての自然史博物館を目指します。そのために、展示施設としての博物館だけでなく、研究と収蔵を優先し、加えて交流と教育普及の機能を伴わせます。県内における絶滅や消失してしまう種の標本の保存はもちろん、自然の現状を調査研究し、県民とともにそれを生かし、後継者を育てることが現在の自然史博物館の最重要課題です。

2. 県立自然史博物館の機能と業務

現在静岡県の自然については、自然の実態である動植物の分布や生態系について自然環境の現状把握と基礎研究が組織的に行われていません。したがって、県内の自然環境の現状把握調査を組織的に順次行う必要があります。この活動は県内の自然研究会や地域の自然愛好家などの協力を得て行い、後継者育成もその目的に含めます。また、散逸の危惧される標本保存も継続しますが、現状把握調査で収集された標本保存も積極的に基礎資料として保存を行います。

この活動を通じて県内の自然研究会や地域の自然愛好家との交流を積極的にはかり、交流会や観察会、展示会などを通じて普及教育活動を展開します。

3. 施設の規模と機能

前述した博物館の目的と機能から、研究と収蔵機能を優先し、交流と教育普及の場も設けます。規模としては、とりあえず全体で 12,000 m² 程度の延床面積を希望します。当初は大規模な展示場は必ずしも必要ではありませんが、3,000 m² の展示スペースを含めています。なお、展示

については移動特別展などで、県内のサテライト施設を利用することも可能です。設置場所については、県民の利便および周囲を自然観察地として利用することを考慮すると、中部地区の有度山山麓が最適地として考えられます。

規模 空間の大きさ

研究スペース	2,000 m ²
管理スペース	1,500 m ²
交流スペース	500 m ²
教育スペース	1,000 m ²
展示スペース	3,000 m ²
収蔵スペース	4,000 m ²
合計	12,000 m ²

4. 職員の人数と役割

博物館の目的と機能から、各分野の専任の研究者を多数採用し、また専任の収蔵情報管理者および教育普及担当者も採用します。これら専任職員の補佐として嘱託職員を常勤または非常勤で配置して業務を行います。

研究者は地学（化石・岩石）、動物（昆虫・無脊椎・脊椎）植物（維管束・その他）、その他（地形・環境・生態系など）の分野をカバーできるようにします。

研究者	20名
収蔵情報管理者	5名
教育普及担当者	5名
事務職および嘱託職員は別	

5. 開設準備室の早期立ち上げ

博物館の企画と建設には5～6年を要するため、学芸員や専門スタッフを早急に配置し、一刻も早く「自然史博物館設立準備室」または「仮称自然史研究センター」を県が立ち上げて、建設に向けて進んでもらいたいと思います。

スイスの川の近自然化

—チューリッヒ州の川づくりをまなぶ— (その2)

板井 隆彦

前号では、18年度自然史博 NET 総会での講演の前半部の日本における多自然型川づくりの不満から、最初のスイス・ドイツの研修に至るまでをのべました。その続きです。

2回目の研修は、スイスとくにチューリッヒ州の河川を中心に、①近自然化の目標、②環境保全への国民の関与、③河川底生生物からみた近自然化の実現度の評価を課題として取り組みました。

スイスは九州程度の広さの国土をもち、人口は愛知県程度しかありません。石灰岩が地質として卓越する山国で、湖沼や丘陵・平地に氷河地形が多く見られます。国の南面・東面にアルプスがそびえ、国土の2/3はそこに源を発するライン川の流域となっています。この国は古くから人々が往来し、ライン川がその通路となっていました。国土の開発は進み、森林は30%しか残されませんでした（日本は60%）。このため現在この国では森林の保全が義務づけられ、山地や丘陵の頂部は森林として保全され、その麓に開かれた牧場や耕地もよく緑で被われています。

ところで、この国は26の州からなる連邦国家ですが、国の政治は直接民主制をとっており、国民はイニシアティブ（国民提案制度）とレファレンダム（国民投票制度）により政治に関与します。連邦政府の憲法は先行して改正されたベルン州の環境憲法に準じた環境保全の立場にならって制定され、「生物（Kreatur）に対する責任の下でそれと共生する共同体の形成」、「将来世代の環境権」、「環境保全に対しては国民の基本権さえ保留」などが定められ、国民の環境に対する関心は日本とは比べものになりません。

スイスはすでに述べましたように歴史の古い国で、水源としてあるいは交通路として利用された関係上、ほとんどの川は古くから改修を受けています。さらに近代では農地開発のため、現代では工業化に伴って河川整備が実施され

てきました。とくに1960年代には工業化の進行によって、河川の多くが排水路となりました。汚水の流入で川が汚れ、湖も汚れて魚は住まなくなり、上水や水浴にも困るようになったそうです。

1970年代に入り、国の施策が環境重視へと転換し、まず河川や湖沼の水質浄化への取り組みが始まりました。都市・農村一律に高度な処理を行う下水道を整備しました。現在この国では下水道はチューリッヒ州では100%、国全体でも97%整備されています。こうして川や湖の水が清らかさを取り戻すと、より優れた自然の回復を住民が望むようになりました。

このような背景のもとチューリッヒ州建設局のクリスティアン・ゲルディー技師らにより、古く改修されて直線的で石に囲まれ無機的だった川を、蛇行させ、石をはいで土を表させて生きものが豊かに住む、より「自然に近づける」ための再改修が始められたのです。「近自然河川工法」とよばれるこの手法による川の近自然化は、小河川から大河川へと、また町から農村へと広がり、やがてこの手法は河川にとどまらず道路から街づくりに至まで広がっていったのです。

スイス・チューリッヒ州における河川の近自然化のいくつかの事例を紹介しましょう。まず大川ですが、Tuhr川ではライン川合流部近くの下流域に常習的な水害被害があり、総合的な治水対策事業の一環として近自然化が行われました。Andelfingen村付近では水衝部の石積みを廃し、林を保全してその倒木を護岸とし、Gutighausen村では川幅を広げ、水衝部は古いコンクリートの護岸を廃して土堤としてそこに空石積みの水制を配置したのです（写真1）。これらの工法の安全性は2005年8月の大出水でもほとんど無傷であったことで確かめられました。

チューリッヒ湖西岸に沿ってながれ、チューリッヒ市街地にはいるSihl川は中規模の川で、

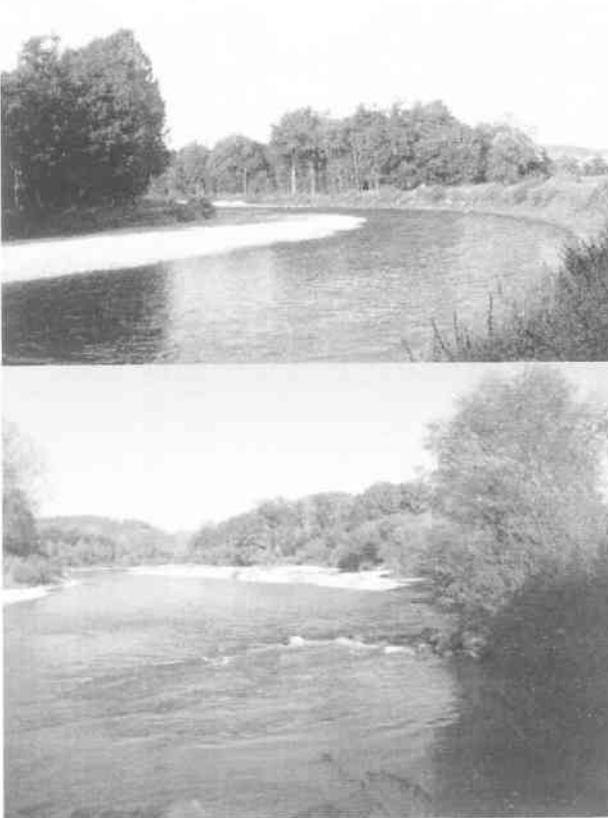


写真1 Gutighausen 村付近の Tuhr 川。川幅を広げ蛇行水衝部の古いコンクリート護岸（上）をとり、土堤として蛇行部に小さいながら淵が形成するように空石積み水制を配置（下）。

この川でも多くの近自然化の事業が展開されています。私はこの川では3箇所について底生動物を調べることによって近自然化の結果を評価してみました。市街地におけるどちらかといえば親水的な改修、中流における蛇行形成まで行った近自然化、その中間における道路事業のミチゲーションとしての川の近自然化のうち、底生動物の生息状況から見れば最後のものが、まだ未完成ながら最も優れているように思いました（写真2）。

小河川はチューリッヒ市郊外の多数の小河川も含めいろいろ見ましたが、ゲルディー技師らが取り組んだ Neftenbach 村のネフバッハ川やその上流のクレーブスバッハ川でも河川景観におけるダイナミクスの回復度を見るほか、底生動物を調べて近自然化の達成度を評価しました。ゲルディー技師らに近自然化されたやや古い区間は、底生動物の生息の点では未改修区間との違いがほとんどなく、それは実はほぼ予想通りだったのですが、2004年に近自然化されたクレーブスバッハ川の区間はごく自然的な蛇行が川のダイナミクスによって形成されており、改修後わずか1年しか経過していないに



写真2 Sihl 川の Allmend 地区では両岸の石組み護岸をとって川を近自然化。



写真3 Chrebsbach は1970年代に農地改良のため掘り下げられてできた水路で、3面に石組み護岸がある。川は自然的に蛇行を形成した。

もかかわらず、底生動物は古い近自然化区間よりも多様だったのです（写真3）。

私がこの研修で学んだのは、川の近自然化においては、蛇行を形成するような川のダイナミクスを重視し、その回復をはかり、それによって瀬と淵が形成されることが最も重要だ、ということです。先進的なスイスの近自然化も当初は蛇行がほとんど回復されない形式的なものでしたが、近年は、このダイナミクスの回復を重視する方向へ向かっています。この方向こそ日本の川づくりでこれから求められるものといえるでしょう。

2006 年
三二博物館『静岡の自然』報告

横山 謙二



三二博物館の展示



顕微鏡での微化石や蝶の観察



巴川の生物の展示



議員さんたちも見学して懇談

平成 18 年 8 月 21 日から 8 月 27 日までの 7 日間、静岡市清水区庵原分庁舎にて三二博物館『静岡の自然』を開催しました。前回、平成 17 年度の三二博物館では、事業室移転をしてきたばかりで、十分な広報活動もできず、来館者数もわずか 130 人という残念な結果でしたので、今年こそは、多くの市民の方々に来ていただこうと準備してきました。

準備は、5 月からはじめ、展示計画、広報活動をしなが、展示に使う材料や標本の収集を行いました。展示した植物標本は、昼休みを利用し会場内の雑草を収集したものです。標本作成コーナーで使う昆虫や哺乳類のウンチも 7 月の始めから収集してきました。

広報活動は、静岡県教育委員会と静岡市教育委員会の後援をいただき、静岡市内の小中学校

にポスターを配布しました。また会場近くの辻小学校、第一中学校には、生徒の人数分のチラシを配布しました。また、辻公民館にもポスターを配布しました。また、静岡新聞に三二博物館で展示する標本紹介を 4 回の連載していただきました。この連載は、実は 5 回を予定していましたが、小泉首相の靖国神社参拝の報道で、4 回の連載になってしまいました。思わぬ、靖国問題の影響が……笑い。

展示内容は、身近な自然をメインテーマとし、パネル展示や昆虫・植物・化石などの実物標本の展示を行いました。また、化石発掘体験コーナー、顕微鏡観察コーナー、標本作成コーナー、レプリカ作成コーナーなど子供たちが体験し学べるコーナーを充実させました。また、26 日（土）には観察会『街の化石』、27 日（日）に



街の化石見学でドコモショップの柱の化石で説明



興津川での自然観察会 どんな生き物がいたかな

は興津川の自然観察会を行いました。人気展示物は、受付近くの世界の昆虫と巴川の魚の展示でした。また、体験コーナーは、子供たちに人気で、中には3日間通って、すべての体験コーナーをじっくり楽しんだ子供もいました。

来館者数は、7日間で244名、26日観察会『街の化石』の参加者は11名、27日の黒川の自然観察会の参加者は22名でした。来館者数で言えば、去年より100名ほど上回りますが、準備に費やされた月日は去年の2倍の4ヶ月間の努力を考えると少ない来館者数だったと思います。来館者は、静岡市の方が大半をしめ、伊東市、裾野市、浜松市などからも来ていただきました。ミニ博後半の26日には、県会議員の佐野愛子さんが、27日には衆議院議員の上川陽子さんと県会議員の天野一さんが来館され、我々の活動の目的や自然史博物館を設立推進について話す機会をもてました。また、何度も

来て下さる来館者の方や平成16年度、平成17年度のミニ博に来てくれた方もいました。こうした来館者の方々からは、来年もここでミニ博を開催して欲しいという要望やまた春にも開催して欲しいという要望がありました。開催期間中、自然博ネットの会員になってくれた来館者もいました。NPO法人になりミニ博物館を開催するのは今年で3回目、来館者数は少ないですが、確実に県立自然史博物館設立を要望する人や将来県立自然史博物館ができたときに通ってくれるリピーターの数が増えてきているようです。

これからも、県立自然史博物館が設立するまで、静岡県の守り残すべき自然を多くの人に知ってもらい、自然史博物館の必要性をうったえる場の一つとしてミニ博物館を続けていきたいと思えます。

第11回 リバー・ネット・サンス 2006 のお知らせ

静岡市麻機遊水地や巴川をきれいにする事を目的に、毎年開催されています。清掃活動や自然観察会、木工教室など、楽しいイベントが目白押しです。当NPOも後援しています。ぜひ、ご家族で参加してください。

日 時：平成18年11月19日（日）9時～14時30分まで

場 所：静岡市郊外 麻機遊水地 中央サッカー広場

持ち物：水筒、弁当、雨具、観察用具（双眼鏡など）

雨 天：小雨決行

内 容：周辺清掃、麻機自然博物館、自然観察会、バードウォッチング、凧作り、木工教室、エコ紙芝居など（参加費：無料）

申込み：必要ありません。直接現地へ

<http://www.river-r.jp/>

静岡県の昆虫 (10)

ミヤマシジミ

高橋 真弓



ミヤマシジミのオス



ミヤマシジミのメス

Lycaeides argyrognomon
(Bergsträsser, 1779)

シジミチョウ科の一種で、ミヤマというのは深い山という意味ですが、実際にそれほど深い山にすんでいるわけではありません。開張は28mmぐらいで、道ばたに見られるヤマトシジミよりもいくらか大型。♂の表面は青紫色に美しく輝きますが、♀の表面は暗褐色で後翅(羽)に数個のオレンジ斑があります。裏面の地色はわずかに褐色を帯びた白色で、前翅から後翅にかけて太いオレンジ色の縁どりのあるのが特徴です。

この蝶は中部ヨーロッパからシベリアや日本を含む極東ロシアまで広く分布していますが、日本国内では分布が狭く限られ、おもに本州中部の河川沿いに生息しています。近年環境の変化のために多くの生息地が絶滅し、環境省のRDBでは絶滅危惧種Ⅱ類に、静岡県版RDBでは準絶滅危惧種とされています。

静岡県下では、現在安倍川、大井川、天竜川などの大河川の河原や堤防などに生息し、中小の河川では興津川流域のみに見ることができます。1950年ごろまで富士川下流の堤防にも見られましたが、ここでは1960年代に絶滅したようです。

これらとは別タイプの生息地として、富士山麓の火山れきの多い“火山荒原”があり、富士宮市の大沢扇状地とその周辺、御殿場市の陸上自衛隊東富士演習場、山梨県側では同北富士演習場などに生息しています。

この蝶の生息地はマメ科植物の小低木コマツナギの多い河原やそれに隣接する堤防や火山れき原などで、その幼虫はコマツナギの葉や花を食べて育ちます。

大井川中流などの河原では、成虫は5月後半から10月末ごろにかけて見られ、年に4回ぐらい世代をくりかえします。最後の世代から生まれた卵は、そのまま冬を越して、翌年の春コマツナギの芽吹きとともに孵化してその若葉を食べ始めます。

幼虫は背中から蜜を出し、それにクロヤマアリやクロオオアリなどが集まって蜜をなめます。これらのアリ類は幼虫を攻撃しようとする寄生バエなどの天敵を追い払います。

この蝶の生息地はそのまま放置されると、クズなどに被われて失われることが多いので、現在静岡市では“アドプト・プログラム”により草刈りをして、生息地を保全する事業を続けています。このような蝶を守るには人の力による自然への働きかけが必要なのです。

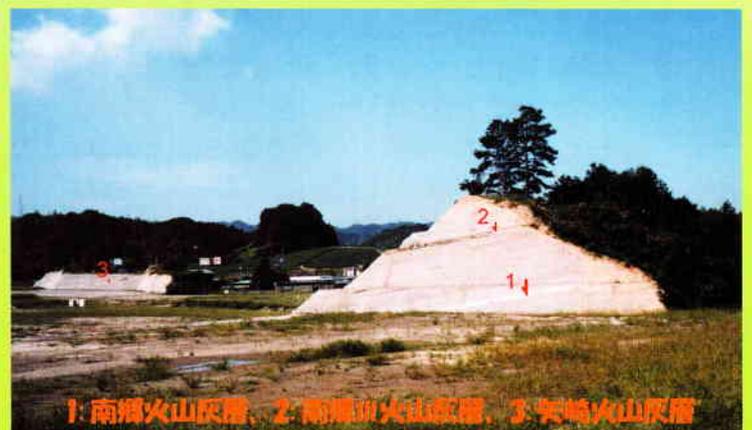


今から 400 万年～ 100 万年前に海底に堆積した掛川層群には、白色の火山灰層がしばしばはさまれています。上の写真は掛川市東平尾の道路沿いに見られる五百斎（いおずみ）火山灰層の露頭（地層が見られる崖）です。この火山灰層は、掛川市満水から桶田、中内田、東平尾、稲荷部、岩滑、菊川市大石、河東まで連続して見られ、白色から灰白色の細粒火山灰層と粗粒火山灰層が交互に重なっています。中内田から南ではその上に軽石が含まれるとても粗い火山灰層が重なり、地層の厚さも 15m と倍になります。火山灰はほとんどが火山ガラスからなり、少量の長石、石英、黒雲母、角閃石が含まれ、その成分と上下の火山灰層の特徴から新潟県の中永白色火山灰層と同じものとされ、推定年代値が 220 万年とされています。

火山灰は火山が噴火したときに上空に吹き上げられた細かな火山砕屑物で、落下して陸地や海底に堆積したものです。一回の火山噴火で噴出した溶岩や火山砕屑物はすべて同じ成分で、別の噴火活動の噴出物とは区別できます。したがって、同じ火山灰層が離れた場所で発見されると、それをかさむ地層は同じ時代に堆積したことがわかります。掛川層群のように砂層や泥層などの同じような岩相の地層では、地層の順番がわかりにくいために、他と区別できる火山灰層が連続することは地層の上下を知るのに役立ち、「鍵層」と呼ばれます。

五百斎火山灰層のように厚い火山灰層を堆積させたような火山噴火が起こったとすると、陸地のすべてが厚い火山灰層に埋まって、植生が絶え山地が荒廃して大規模な山地崩壊や大洪水が起こったと考えられます。五百斎火山灰層の上部の粗い火山灰層は地すべり堆積層と考えられ、その上位に連続する粗い砂の地層とあわせ、大量降灰とそれにひきつづく大洪水の結果を記録していると思われる。

右は、東名高速掛川インターの西側の造成地の露頭の写真で、3 層の厚さの薄い火山灰層が見られました。私たちが調べた結果、掛川層群には 150 層以上の火山灰層がはさまれているのがわかりましたが、地層が見られる露頭が残されていないために、発見された火山灰層の半分以上は現在見ることはできません。火山灰層は地層の鍵となる重要なものであるため、その露頭または標本の保存も今後課題となると思われます。



1: 雨畑火山灰層、2: 雨畑沖火山灰層、3: 穴嶋火山灰層

自然観察会の報告
富士山五合目「お中道、宝永火口自然観察会」

足立 京子



宝永火口



森林限界付近の植物観察



アマツバメの群れを観察



ビンズイの観察

7月23日(日)静岡駅南口から乗用車5台、20人で富士山に向かいました。数日前から不安定な天候で、雨に備えてマイクロバスをキャンセルしての決行でした。幸なことに雨ではなく曇り空。国道1号線の途中で富士山の頂上が晴れているのが見えました。なんて運の良いことでしょうか。富士山に近づくとどんどん雲が増えて、霧の中を走りました。新五合目の駐車場に着くと強風が雲を飛ばしてくれていました。現地集合した5人と合流しました。今回はSBSテレビの取材の方、3人も駐車場から同行しました。28人で宝永火口を目指し出発です。

今日の講師は、植物は杉野孝雄さん。鳥は三宅隆さん。蝶は、高橋真弓さんと諏訪哲夫さん。地質は、横山謙二さんです。

歩き初めは、カラマツとラベの合間にトウヒ、ミヤマヤナギ、ミヤマハンノキが見られ、それら樹木の下に平地では見たことが無い小さく赤いイタドリやオンタデ、ミヤマハンショウヅ

ル、フジハタザオ、フジアカシヨウマ、ツルキンバイ、タカネイバラ、ムラサキモメンヅル、イフオウギ、タカネグンナイフウロ、コイチャクソウ、ベニバナイチャクソウ、ハナヒリノキ、コケモモ、ヤマホタルブクロ、ミヤマオトコヨモギ、ヤハズトウヒレン、ミヤマアキノキリンソウ、クルマユリ、マイズルソウなど意外と多くの植物が見られました。高橋真弓さんがフジハタザオに産み付けられたエゾスジグロシロチョウの卵を見つけました。出迎えてくれた鳥は、ウグイス、クワイタダキ、ルリビタキでした。

登っていくとだんだんカラマツの背が低くなり、植物も単調になっていきました。タヒバリが見られました。視界が開けてくるとアマツバメが悠々と飛んでいる姿を見せてくれました。

もうすぐ宝永火口。さらにカラマツの背が低くなり、左に曲がると宝永山がそびえていまし

た。これぞ自然の芸術という感じ。大きくえぐられた赤っぽい山肌。ものすごい強風。そこを飛ぶアマツバメはより美しく見えました。ここで昼食を兼ねた休憩です。ここでは、ビンズイが見られました。道端にコタヌキランを見つけました。その他の植物はより背の低いカラマツとオンタデ、イタドリ、イフオウギくらいでした。中でもオンタデの力強さに驚きました。急な砂利の斜面にポツポツと根を張り立派に花を咲かせていました。

その後、一気に六合目に向かいました。途中でカヤクグリとビンズイを見ることが出来ました。六合目には噂には聞いていたエコトイシがありました。1回200円。少なくとも2人は利用しました。利用した人に感想を聞くと『すっきりしました。』一言でした。この辺りで濃い霧に包まれ、急いで下山しました。

残念なことに蝶は、飛んでくれませんでした。諏訪さんと高橋先生の提案で富士宮市の大沢という蝶がたくさんいるところへ行くことになりました。どんな蝶が飛んでいるのか？

クワクワ向かいました。先頭車両は諏訪さん。蝶のもとへ急ぐ気持ちが伝わる運転に後続の車は、追いつくのに必死でした。着いてみると、知らなければ絶対に入り込めないような草の茂みが少し切れた所が入口でした。ここで雨が降ってきました。入ってみると少し広場があり、ネムノキが花を咲かせていました。その下あたりにジャノメチヨウが飛んでいました。奥に進んでいくと道は狭くなりホソバセセリが数頭飛んでいました。ナナフシもいました。蝶は3種でした。昔はたくさんいたそうです。帰り道、ササゴイのコロニーがあるとの情報の元に清水区の清見瀧公園に寄りました。ササゴイは5羽。コロニーがある木の下に薄緑色の卵の殻が数個落ちていました。

一日でたくさんの生物の観察会が出来るのは、自然博ネットの一番いいところではないでしょうか。スペシャルな一日でした。

8月1日、SBSテレビ『テレビタ刊』で宝永火口観察会の様子は放映されました。

会員動向と会費納入について

本年度、静岡県のみなさんに広く私たちの活動を知っていただき、会員を増やして活動を支援していただこうということで活動を行ってきましたが、おかげさまで今年度これまでになんと、132名の方が新入会されました。そのうち正会員は91名、サポート会員は40名、賛助会員が1名です。これまでの会員とあわせて合計で272の個人と団体会員になります（正会員209名、サポート会員42名、団体会員20名、賛助会員1名）。

本年度の会費納入が未納の方は、お早めにお願ひします。今年度から正会員ではその年度の10月末までに、サポート会員では6月末までに会費が納入されていない場合には、「自然史しずおか」の発送を停止させていただきます。

未納の方には会費未納の場合は催促状もお送りします。今年度に会費をすでに納入された方の中には、昨年度未納だった方がおられ、会計上はそれは昨年度分として処理していますので、今年度分の請求があると思います。そのような方には申し訳ありませんが、会費納入についてご確認いただき、今年度会費の納入をお願いいたします。

会費未納の方には振替用紙を同封しております。また、「自然史しずおか」の発送封筒のタックシールに会費納入年度が記載されていますので、ご確認ください。

郵便振替口座	00860-8-56970	加入者名	自然博ネット
正会員	3000円	サポート会員	2000円
団体会員	5000円	賛助会員	1口 10000円



南アルプス南縁の一等三角点

輿石 邦昭

南アルプスは、長野、山梨、静岡の3県にまたがる一大山脈で、静岡県内では日本第4の高峰、間ノ岳(3,189m)から南方に未広がりにつながる山系を形成している。東縁の白根山脈は山伏(やんぶし、2,014m)で分岐して、一方は大井川左岸に沿って志太平野に、もう一方は安倍峠から十枚山(1,726m)を経て安倍川左岸沿いに竜爪山地から静岡平野に至る。西縁の赤石山脈は光岳(2,591m)付近で分岐し、中央構造線沿いに湖西連峰と寸又川、大井川沿いに八高山山地につながる。一等三角点は南アルプス南縁に位置する竜爪山地の文殊岳(1,041m)と八高山地の八高山(832m)にある(図1)。

文殊岳は薬師岳と共に双耳峰を成す竜爪山の一峰である。静岡駅の北方12kmに位置し、山頂へは国道1号線中之郷交差点から県道201号(通称、竜爪街道)を北上し、平山バス停先約3kmの穂積神社鳥居より登りはじめる。長尾川沿いの登山道には約1,000万年前の静岡層群の砂泥互層および砂岩層が露出する。約60分で穂積神社に至る。スギの巨木の間を抜けて鉄製の階段を急登すると稜線上にでる。そこから左方へ100mほど行けば薬師岳(1,051m)の頂上に至る。ここまでは穂積神社から60分ほどである。鉄製の階段付近は約1,500万年前の竜爪層群の火成岩が静岡層群と南北方向の断層線で接し、この断層線は登山道を横切っている。薬師岳から約15分、植林帯を下って自然林の中を登り返せば、竜爪山一等三角点の標石(図2)が埋設されている山頂にでる。山頂からは、駿河湾、今なお隆起している有度山と静岡平野が一望でき、沖積平野に浮かぶ谷津山や八幡山が島のように見える。穂積神社に戻って西里方面へ林道を50分ほど下ると、竜爪層群と静岡層群を境する断層の露頭を見ることができる。

八高山は大井川鉄道、福用駅の西北西約3kmに位置する。福用駅が登山口で、スギとヒノキの生えた尾根を90分ほどで4林道の交差点で



図1 南アルプス南縁の一等三角点



図2 一等三角点標石：竜爪山(左)、八高山(右)

ある馬王平にでる。さらにスギ林を約40分で白光神社に着き、山頂まではここから10分である。山頂からは、南アルプスや富士山まで眺望でき、眼下には大井川の鶺鴒山の七曲り、古大井川の曲流跡が一目できる。南方の小笠山丘陵も美しい。帰路、家山の河跡湖である「野守の池」では側方侵食による急崖や古大井川の曲流が切断されて残された天王山台地が眺められ、福用駅の南の龍門の谷では約7,000万年前の砂泥互層の横臥褶曲(県指定天然記念物)を見ることができる。

故稲葉 茂氏の蝶類標本

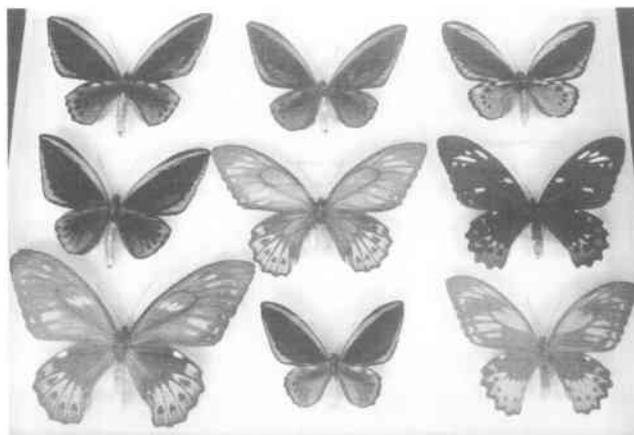
諏訪 哲夫

県庁の土木畑の職員であった稲葉茂氏は1982年退職後、建設会社に再就職されたが5年後の1987年8月逝去された。享年60歳の若さであった。

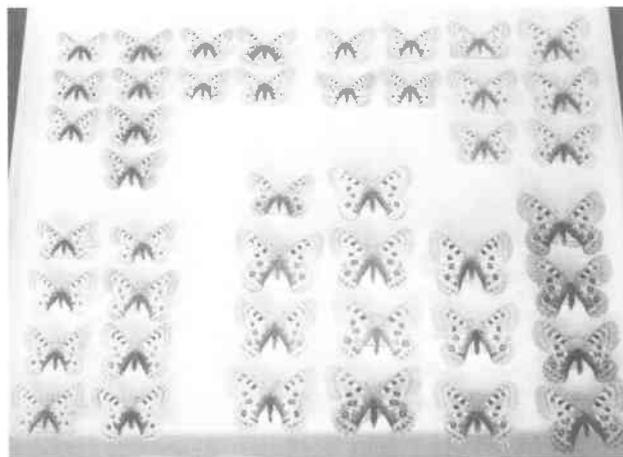
氏は学生時代に蝶の採集を始め、標本を所有していたが、その後仕事の多忙さなどから蝶の採集は中断し、標本も失われてしまった。県庁の土木部に蝶の好きな職員が2名いたこともあって、1970年代のはじめごろから再び蝶の採集をはじめた。県内各地はもとより、山梨県、長野県、沖縄などに頻りに採集に出かけ、ついにはネパール、マレーシアまでも足を伸ばした。この間にいくつかの貴重な記録を発見し、静岡昆虫同好会の会誌に発表している。その中で特筆すべき記録は、分布しているとは当時誰も考えていなかった富士山本体からのスギタニルリシジミの発見や、今までに本県で10頭は採集されたことのない極めて稀なジヨウザンミドリシジミを富士山の西麓で発見したことなどである。また、ご自身では採集に出かけるのは困難な外国の地域の種については購入することによってコレクションを増やしていった。中国奥地の極めて珍しいウスバシロチョウの仲間やニューギニアの高地に生息する大きくて大変美しいトリバネチョウの仲間などである。これらの蝶は本物を身近で見ることは困難なものばかりである。所蔵しておられた標本はドイツ箱で100余箱、国内産約3300頭、外国産約2000頭であった。

これらの貴重な標本が散逸、あるいは消滅してしまうことは誠に忍びないことであったので、前述の職員の中の1名と私が企画部に要請した結果、こどもの国が完成したらここに保管、展示するというので県で購入していただくこととなった。県が購入するためには額を決めるための評価をしなければならず、そのためのリスト作り作業が大変であった。コンピュータのない時代すべて手書き、少人数で行ったため、2年近くかかったように記憶している。

こどもの国が完成するまでの間、標本を保管



トリバネチョウの仲間



ウスバシロチョウの仲間



蝶の標本箱は標本タンスに整理されています

する場所が課題であったが、昆虫を研究している職員もいる浜北にある県林業技術センター

をお願いすることとなった。その後、こどもの国の計画が見直され、昆虫標本などを保管し展示するスペースとれなくなったことから保管は現在に至るまで、約 13 年間林業技術センターをお願いしてきた。

県の自然学習資料保存事業が軌道に乗り、保管場所も三島から清水へ移動してスペースも狭いながらも確保できたこと、林業技術センターも業務の傍ら管理していただくのには何かと限度があること、また自然学習資料としてすでに受け入れた標本と一体的に扱えば、学術的資料としてまた展示の材料として役に立て易

いことなどから移動を希望していたところである。

このたび関係する部局の方々のお骨折りにより清水に移動することが決まり、さる 7 月 25 日に移動を終えた。この標本は 8 月 21 日から 1 週間 NPO 静岡県自然史博物館ネットワークが開催した「ミニ博物館」展の展示にさっそく活用することができた。

この標本の評価はすでに終了しているが、今後、他の評価済みの昆虫標本と同様、受け入れラベルの作成、データベースへの入力を行っていく予定である。

自然観察会のお知らせ

紅葉の静岡市梅ヶ島安倍峠 自然観察会のお知らせ

梅ヶ島から安倍峠への林道は、長い間通行止めでしたがやっと通れるようになりました。安倍峠から流れるサカサ川を歩きながら、オオイタヤメイゲツなど、初冬の紅葉を楽しみましょう。どうぞ、ご家族で参加してください。

日 時：平成 18 年 11 月 5 日（日）

集合場所：JR 静岡駅南口（ルノアールの像前）8:00 自家用車分乗で行きます。時間厳守

会 費：大人 2,000 円 小学生以下 1,000 円

持ち物：水筒、弁当（途中調達可）、歩きやすい靴、雨具、観察用具（双眼鏡など）

雨 天：中止

講 師：植物 杉野、野鳥、哺乳類 三宅など

申込み：10 月 25 日までに事務局または、辻事務所まで、氏名、住所、電話番号（あれば携帯も）、集合場所（静岡か富士）を明記の上、葉書、ファックス、又はメールにて申し込みください。資料保存室 電話、Fax 0543-67-2111 メール (bureau@spmnh.jp)

掛川化石採集会のお知らせ

地団研静岡支部・NPO 自然博ネット 共催

今から約 200 万年前の掛川の海の地層を観察し、そこに含まれる貝化石を採集しよう！

日 時：10 月 8 日（日）9 時 40 分

（終了予定 15 時ごろ）

集 合：天竜浜名湖鉄道 はらのや駅

時刻表：掛川駅 8：49 発－はらのや駅 9：03 着

掛川駅 9：21 発－はらのや駅 9：37 着

持ち物：お弁当、水筒、雨具、化石採集の道具（ハンマー、タガネ）など

お問い合わせ：0543（67）2111 横山まで



はらのや駅近くの露頭の化石